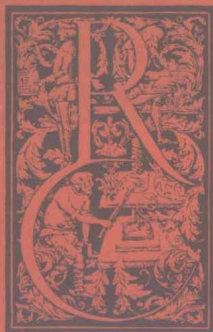


名越健郎著

メコンのほとりで

裏面史に生きた人々



大河メコンを活写し
流域の秘話と真実を
発掘する特派員報告

メコンのほとりで

中公新書 846



中公新書 846

名越健郎著

メコンのほとりで

裏面史に生きた人々

中央公論社刊

名越健郎 (なごし・けんろう)

1953年(昭和28年), 岡山県に生れる。

1976年, 東京外国語大学ロシア語科卒業。

時事通信社に入社。1982年~85年, パンコ

ク特派員。現在, 外信部。

メコンのほとりて

中公新書 846

© 1987年

検印廃止

昭和62年7月15日印刷

昭和62年7月25日発行

著 者 名越健郎

発行者 嶋中鵬二

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京 2-34

定価 540円

ISBN4-12-100846-4

はじめに

本書は一九八二年六月から八五年十一月まで、時事通信社のバンコク特派員を務めた私が、東南アジアの大動脈メコン川流域に取材した体験をもとに書き下ろしたものである。

「天使の都」バンコクも近年は急テンポの開発で騒音と喧噪、排気ガスが充満して窮屈な社会となり、私は暇をみては地方に脱出した。高層ビルの立つ都心から車で一時間も行くと、ニッパヤシと水牛、高床式住居という昔ながらの農村が広がり、熱帯の田園地帯特有の怠惰な開放感にひたつたものだ。都市と農村の圧倒的な格差のなか、農村部に息づく宗教、風習、祭りの類いは、言葉の障害を越えてなんとも懐しい風物詩だった。タイの全七十二県中約六十県に足を踏み入れたと思うが、革命後門戸を閉ざしたベトナム、ラオス、カンボジアのインドシナ三国にも何回か取材で入国した。

タイの地方やインドシナの旅を通じ、この地域を蛇行するメコン川の滔々たる流れには圧倒され、何度か川岸に佇んで、しばし見とれたものだった。メコンを最初に見た時から、いつの日かこの川を書いてみたいと思い続けてきた。帰国後、冷房の効いたバンコクの支局での記憶は次第に薄れてしまったが、メコン川のダイナミックな流れとメコンに沈む雄大な夕陽は、あの噎せ返るようなインドシナの乾期の暑さとともに今も鮮明に記憶している。

もとより、私の筆力では実物の迫力を描き切れないことは承知しているが、残照が消えないうちに書き残しておきたいと思って執筆した。

本書では、第一章をメコン川の描写にあて、第二章以下では流域各地で取材したささやかな、しかし私にとっては最も印象深いドラマを紹介したが、モチーフは二つある。

一つは、今世紀最長のベトナム戦争で戦場と化し、アジア最貧地帯となったメコン流域にもう一度スポットをあててみたかった。国際報道の場では、ベトナム戦争後のインドシナはすっかりローカルな地域となってしまうが、戦後十年のインドシナの変貌、特に戦後特有の脱力感と虚無感、そして打ち続く社会の混沌を伝えたかった。取材不足のため、流域住民の肉声を十分書ききれなかった点を反省している。ベトナムの現状に対して、少し厳しすぎる評価になったかもしれないが、私自身はあのベトナム戦争は「民族解放闘争」というより「革命戦争」と位置づけており、難民流出など解放後の一連の困難は革命の論理的帰結とみなしている。今はグエン・バ

ン・リン新体制下での改革が成功し、メコン流域の開発を願うだけだ。

第二に、わが国では負のイメージが定着しているメコン流域のいくつかの事件ないし人物を再検証し「実像」を伝えたいという欲望があった。第二章以下で取り上げたテーマは、大方の読者にとって、逆説的な響きを持つかもしれない。チェンマイの玉本事件や第二次大戦の未帰還兵、旧南ベトナム政府軍の將軍などは既にネガティブなイメージが定着しているからだ。動きの激しい日本では、忘れ去られた問題でもあり、いまさらなぜ、という印象を与えるだろう。

しかし、私自身は取材中たまたまこれらのエピソードに遭遇し、自らの先入観と実像の格差に愕然とした。毎年定期的にチェンマイへの「巡礼」を続ける玉本さんの母、国境の山岳地帯で戦死者の遺骨拾いに奔走する残留日本兵、国家の名誉を守るため、孤立無縁の状況に置かれて惨殺された駐ラオス臨時代理大使夫妻。インドシナの地に埋没しつつあるこれらの秘められた裏面史を発掘するうちに、彼らをもう一度見直し、名誉回復すべきではないかと考えた。

また、私の会ったカンボジアの王女や南ベトナムの元將軍にしても、わが国にある旧政權の腐敗、墮落のイメージとは裏腹に、動乱に弄ばれながら、革命政權下を真剣に生きようとする重い人生があった。わが国ではほとんど知られていないこれらのエピソードをインドシナの自然と社会のなかで紹介しながら、私自身も所属するマスコミによって構築されたかもしれない短絡的な「虚像」を打破したいと思ったが、この不遜な試みが成功したかどうかは読者の判断に俟たねば

ならない。

執筆にあたっては、三尾忠志大東文化大学教授、田久保忠衛杏林大学教授、入澤邦雄NHK外信部副部長ら多くの方々から貴重なアドバイスをいただいた。また出版に際しては、「中公新書」編集部の平林孝副部長から再三にわたり激励と適切な助言を受けた。心からお礼を申し上げたい。学生時代から親しんできた「中公新書」の隊列に加えていただいたことは望外の喜びである。

一九八七年五月

名越健郎

メコンのほとりで
目次

はじめに

第一章 メコンを下る

ロマンを追って メコンの二つの顔 メコンの開発
ゴールデン・トライアングル 国境密貿易 旧王都ル
アンプラバン ビエンチャンの夕陽 三島由紀夫とイ
ンドシナ イサンの竹田吉文博士 メコンの渡し
クメールの微笑 メコン・デルタ

第二章 巡礼―玉本事件再考

古都の肖像 玉本事件とは 玉本ハーレムの実態
発展するチェンマイ 母親のチェンマイ通い 巡礼の
姿 その後の現地妻たち 現在の玉本さん 日本の
オーバー・プレゼンス タイ人の対日感情

第三章 残留日本兵の告白

郷愁と神秘の国ビルマ 生きている旧日本兵 ブラジ

ル日系二世の戦後　韓国人の町医者　“実在”した水
島上等兵　藤田さんの戦歴　藤田さんの戦後　遺骨
の収集へ　戦没者慰霊塔の建立　藤田さんの静かな怒
り

第四章　メコンの惨劇

首都ビエンチャンの変貌　代理大使夫妻殺害事件の発端
裁判所が示した「事実」　さまざまな謎　ラオスの国
情　事件は終わっていない　杉江夫妻の肖像　妙子夫
人の日記　館員たちの証言　“主犯”モスミット？
ラオス・コネクション　外務省との闘い　真相はどこ
に

第五章　カンボジアの王女

首都プノンペンの活況　大虐殺の影　あでやかな王女
ヘン・サムリン政権の性格　リダ王女との会見　ポ
ル・ポトの地獄　現政権下で　シアヌークへの憎悪

陰微な「ベトナムの影」 シアヌーク待望論 奇跡的

なエネルギー タイ・カンボジア国境ツアー クメール

ル王族の悲哀

第六章 一二都物語―ハノイとホーチミン市

二都の格差 解放の代償 ハン將軍との出会い サ

イゴン陥落 正義はどちらに？ 元参謀次長としての

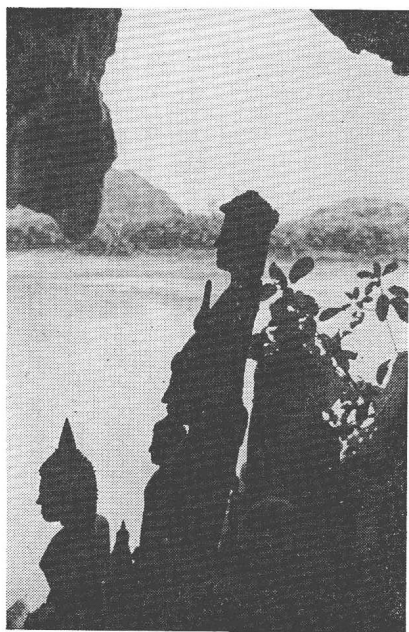
威信 解放十年の苦渋 ベトナム戦争とは何だったの

か 將軍との再会

メ
コ
ン
の
ほ
と
り
で



第一章 メコンを下る



ルアンプラバン上流にあるタムティン洞窟

ロマンを追って

「メコン川のほとりに、もう一度立ってみたい」

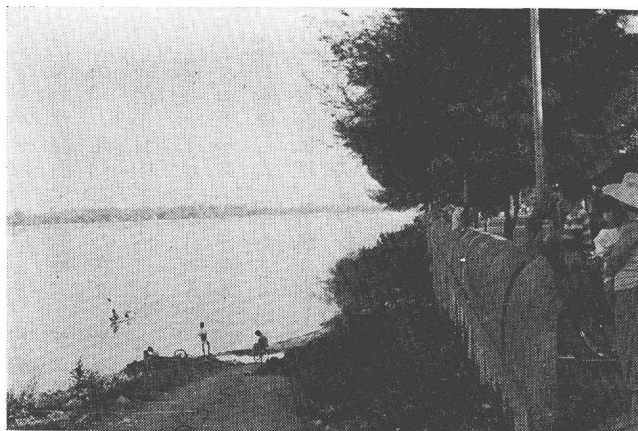
三年半のバンコク特派員生活が終わりに近づいた九月のある日曜日、急にこう思い立ち、東北タイのメコン流域の町ナコンパノムに旅立った。バンコク特派員のカバー領域はタイ、ビルマとベトナム、ラオス、カンボジアのインドシナ三国。これら五カ国を悠々と貫流する大メコンを、帰国前に目に焼きつけておきたいと思ったからだった。

早朝、バンコクのドンムアン空港からタイ国内航空で東北のウドンタニまで飛び、市内のバス・ターミナルから窓ガラスが一枚もないローカル・バスに揺られて国道二十二号線を五時間。イサンと呼ばれるタイ最貧部東北タイを縦断し、ナコンパノムに着くと、陽は既に西に傾き、窓から舞い込む熱風や砂で、汗とほこりまみれになっていた。

三十数度の炎暑とラテライトの赤土、岩石と枯木、そしてヤセ犬の原野という荒涼たるイサン最奥部のパノラマは目がくらむ思いがする。

メコンとの惜別の地にナコンパノムを選んだのは、「あそこから見たメコンがいちばんよかった」とする国際協力事業団（JICA）の故竹田吉文博士の言葉に魅かれたからだった。

バンコク北東七百五十キロ。メコンを背に扇状に広大な広がりを見せる東北タイの要の部分に



ナコンパノムから見たメコン

当たるのがこのナコンパノムである。人口三万、タイさいはてのいかにものどかな田舎町ながら、なかなか国際色のあるエキゾチックな町だった。

住民の三分の一は、四十年前第一次インドシナ戦争を逃れて定住したベトナム難民であり、市内にベトナム料理店やベトナム語の看板が並ぶ。華僑商人やラオス人の姿も目につき、郊外には三万数千のラオス難民を収容するバンナポ・キャンプを抱える。

ベトナム戦争中、この町の十五キロ西方に巨大な米空軍基地があり、数千の米兵が駐留していた。タイ人基地労働者も一万人に上り、ベトナム特需でナコンパノムは大きく繁栄を遂げた。

一九六〇年代末の北爆最盛期、戦略爆撃機B52を支援する戦術戦闘機が五分おきに田園地帯に轟音を残して発進、農民は耳栓をして農作業をしていたという話を聞いた。イサン各地から若い女性がGIの

落とすドルを求めて集まり、基地の町は米兵の歓楽地としても活気づいた。GIとタイ女性の間に生まれた混血児、通称アメリカンはこの町だけで八十人を数える。

だが、一九七六年の在タイ米軍全面撤退から十年。基地の町は元の平凡な田舎町に変貌していた。炎暑の日中、市内はしんとして人通りも少なく、客待ちのシクロ（三輪車）引きが半ズボン姿で暇そうにたむろしていた。米軍関係者目当てに建てられた田舎町には不釣り合いな高級ホテル、ナコンパノム・ホテルは閑散とし、三階建ての六十五室に客は四組だけだった。かつてGIが休日を楽しんだであろうホテルのプールにも人影はない。五十軒を超えたバーやマッサージパーラーも今は四、五軒を残し、多くは放置され、荒れ果てたままだ。イサンの娘たちはそれぞれに村に帰り、アメリカンの子供たちはニューヨークに本部を置くパール・バック財団の支援で細々と暮らしている。

失業者が増え、町が活気を失うなか、ガラガラのナコンパノム・ホテルを経営する華僑のスパチャイ氏が言った。

「この町に、米軍の復帰を望まぬ者は一人もない」

一九六〇年代後半から七〇年代前半にかけて世界に吹き荒れた「GI、ゴーホーム」の怒声は、この町では今「GI、カムバック」のラブコールなのだ。米軍撤退後の静寂、そして「宴のあと」といった虚無感。旧サイゴンやビエンチャンなどインドシナ各地で感じたあの脱力感が鮮明